

---

# 現代中国における魯迅と胡適

張 夢陽

<中国社会科学院文学研究所>

## 要 旨

本稿では主に、比較研究の方法を取り入れ、近代の中国思想と文化史上において最も影響力を持った魯迅と胡適という二人の代表的な人物に対し、掘り下げて比較分析を行った。筆者は、魯迅と胡適が中国近代史上において著名なリベラリストである、と位置付けた。この事は両者の言説の中から証明する事ができる。しかしもう一方で、魯迅と胡適には多くの面で相違する部分も見られる。例えば、魯迅は内面から省みる事に重きを置いたが、胡適は西洋的思考様式の導入を通じて、精神的啓蒙を進める事に重きを置いた。また、両者は共に海外の文明及びその思想的影響を受けたが、魯迅はヨーロッパ大陸的、胡適は英米式という異なる文明を摂取した。この事も、両者の異なる思考様式になった重要な要素である。そして、新たな中国文化を創出する、という見地に立てば、これまで長きに渡って形成された魯迅と胡適に対する偏見と誤解を徹底的に改めなければならない。つまり、魯迅学と胡適学を結合させる事こそ、新たな中国文化を創出する最良の近道となる。

**キーワード** 近代中国、啓蒙、リベラリズム、魯迅、胡適

## I. はじめに—偏見と狭隘な誤認からの脱却—

中国近現代文化史上において「魯迅かそれとも胡適か」という問題は、1世紀に渡り紛糾した。また、現在でも依然として中国人の心中において未解決なままである。これまで人々は、政党あるいは政府の功利的見地から、この二人の著名な文化人の評価を下してきた。「胡適は魯迅に及ばない」でなければ、「魯迅は胡適に及ばない」かのどちらかだ。結局は、優劣を比較するという枠組みの中で思考し、狭隘な視野から脱却できていない。それゆえに、一人が天に昇れば、もう一人は地に落ちた。大陸では、魯迅を神殿に納めた後に、胡適を批判する政治運動が1950年代に行われ、胡は反動のレッテルを貼られ、ブラック・リストに載せられた。しかしながら、ここ20年来において、従来とは相反する「魯迅は破壊的で、胡適は建設的だ」、「20世紀は魯迅の世紀で、21世紀は胡適の世紀だ」という論調が現れた。だが、これも結局は「神格化」と「転覆」の繰り返しに過ぎず、冷静な判断を欠いた見識に過ぎない。

このような認識上の齟齬が現れた原因は、第一に、これまで政治的側面から問題を検証しなければならぬという制約を受け、文明的背景にまで深く立ち入って根源を追求できなかったからである。第二に、一党一派の眼前の利益に固執して、自己の利害関係から魯迅と胡適の優劣を定め、また、人類文明の発展というマクロ的視野から彼らの歴史的功績とその限界を弁別して検討しなかったからである。「魯迅か、それとも胡適の世紀か」という難題を根本的に解決するには、方法論の革新、問題意識、思考モデルの転換、視野を拡大させ改めて歴史を検証

する必要がある。そして、新たにマクロ的な人類文化の発展史的思考枠組みを構築し、政治的制約を克服し、再度、魯迅と胡適に代表される近代中国における「文化」を評価し直さなければならぬ。

こうした思考モデルに立てば、次の四点を克服できる。第一に、優劣を比較するモデルを克服でき、再び魯迅は胡適に及ばない、胡適は魯迅に及ばない、という枠組みの中で考えをめぐらせる事はなくなる。第二に、党派の紋切り型を克服でき、再び共産党に味方した、あるいは国民党に味方したという政治集団の枠組みの中で振り動かされない。第三に、政府からの定位を克服でき、再び政府を擁護した、あるいは反対したという事を考えなくてよい。第四に、人格化あるいは転覆の惰性を克服でき、魯迅と胡適の有益な思想に対し新たな整合を行い得る。

この四点を克服できれば、一党一派の眼前の利益から脱却でき、人類文明の発展というマクロ的視野から、魯迅と胡適の歴史的功績とその限界を弁別して検証できる。これらは、魯迅や胡適らの人物研究に対し有益であるとともに、中国文化の歴史的過程に対し新たな評価をもたらす、近代における新文化の正確な路線を探求するという点でも、過小評価し得ない重要な意義を有する。なぜなら、これらは思考モデルを革新でき、歴史を詳細に見る視点と身を持する基本的態度を変え、新たな思考を以って、再度、歴史と歴史的人物を検証するからである。つまり、こうした事によって、偏った見方に固執せず、狹隘で誤った認識から脱却できると考えられる。

## II. リベラリストとしての魯迅と胡適

魯迅と胡適には多くの対立点がある。しかし、一致している点も看取できる。それは、中国人の思想の自由と精神の解放に力を注ぎ、中国人を啓発して奴隷性を克服させ、思想の独立を実現させ、無自覚な人を自覚ある人へ昇華させようと努力した点である。

魯迅が終生力を注いだのはまさに「奴隷精神」の批判である。彼が終生奮闘した目標は、文学を以って武器となし、中国人を啓蒙して、「無自覚な人」、「蒙昧な人」から「自覚ある人」、「智慧のある人」へ転化させ、青年時代からの「立人」の理想を打ち立てる事であった。晩年に魯迅は共産党へ傾斜したが、彼が共産党に加わった事はない。このような彼の傾向は、1927年に起こった四・一二大虐殺によって造成された。虐殺者に対し彼は「二度とない生命と青春に対して、些かの顧慮も払おうとしない」<sup>(1)</sup>と、思うままの殺害に義憤が胸に満ち、圧迫された弱い群集に対して心から同情した。しかしながら、魯迅は「左翼作家聯盟」内部で、ある共産党指導者が「大旗をひろげて虎の皮にし、それに身を包んで他人をおどす」と感じた時には「恐るべき横暴な連中だ」<sup>(2)</sup>と責めたように、決して奴隷主から奴隷のように酷使される事を受け入れなかった。毛沢東の詩「西江月・井冈山」を見た後に魯迅は「山の頭目」の気概<sup>(3)</sup>だと言い、同時に馮雪峰に対し「あなた方がそちらからやって来るのであれば、まず私を殺さない訳にはいかないだろう」<sup>(4)</sup>と問うた。

胡適が全体主義に反対し、思想の自由と精神の独立を要求した事は、さらに顕著明らかである。1917年に彼が発表した「文学改良芻議」は、実質的には文言文の束縛を解き、思想と表現伝達の自由独立を勝ち取ろうとしたものである。1919年に陳独秀が逮捕された後に「威権」という詩を書き、さらに明確に「奴隷造反」の声を上げた。1920年代に提起した「好政府主義」

で彼は、アメリカ式の民主主義の推進を主張した。後に彼が国民政府と協力したのは、政府内部の宋家を代表とする親米勢力を徐々に強くして、その力を借りながら中国における民主政治を推進させようとしたからである。いわゆる政府の「諫言の士」になるとの彼の一説は、彼が政府の力を借りて民主主義を推進させるとともに、自己の人権独立を保持しようとした事を物語っている。それゆえに、彼は国民党の味方をしたが、国民党には入党しなかった。つまり、単に政治的側面から胡適の評価を下すべきでない。人類文化の進化に有利か否かを基準にして、グローバルな視点から検討を行い、有利な事は肯定し、有害な事は否定すべきである。

1941年7月、胡適はアメリカのミシガン大学で「イデオロギーの衝突」と題した講演を行った<sup>6)</sup>。当時ヨーロッパでの戦争を胡適は、「民主政治と全体政治との衝突」、「自由と奴隷との衝突」、「憲法によって組成された政府と専制独裁との衝突」と捉え、彼はこの戦争を、有史以来、二種類ある生活様式間の戦争であり、二種類の文化の衝突だと主張した。特にイーストマンが列挙した全体主義の20の重要な特徴を、彼は短くして以下のように引いた。

1. 狭義の国家主義的情緒を、狂気じみた宗教にまで高める。
2. 軍隊のような厳格な政党によって政権を握る。
3. 一切の政府に反対する意見を厳格に取り締まる。
4. 超然的な宗教信仰を、国家主義の下に劣位させる。
5. 指導者が信仰の中心になり神と等しくする。
6. 反理智・反知識を唱え、無知な大衆に媚び諂い誠実な思想を厳罰に処する。
7. 書籍を焼き、歴史と科学上の真理を曲解する。
8. 純粋な真理を求める科学と学問を排除する。
9. 武断を以って論争に取って代わり、政党によってメディアをコントロールする。
10. 人民を文化的孤立に陥れ、外部の状況に対し知る術をなくさせる。
11. 政党によって一切の芸術を統制する。
12. 政治上の信義を破壊し、虚妄偽善的な手段を講じる。
13. 政府が計画を立て罪悪を行う。
14. 人民に所謂「公共の敵」を害に陥れ虐待させる事を奨励する。
15. 野蛮な家族連座制を用いて、「公共の敵」に対処させる。
16. 永久戦争を準備し、人民を軍事化する。
17. 手段を選ばず人口増加を奨励する。
18. 労働者階級が資本主義に対し、革命のスローガンを至る所で濫用する。
19. 労働者のストライキや抗議を禁止し、一切の労働運動を打ち砕く。
20. 工業・農業・商業は、全て執政党と指導者の統制を受ける。

この二十条を見れば、現在でも十分に通用し、また当時の様々な全体主義の政治的特徴をまとめたものとしても、実に適切である。当時について言えば、民主的政府を擁護し、全体主義的ファシズム政府に抵抗・反撃を加える事は間違っていない。そして、晩年における胡適の雷震事件に対する態度、蒋介石の誕生日を祝う時に行った彼の「無智・無能・無為」の忠告、中央研究院院長就任式典における蒋介石との学術民主問題上の衝突などは、彼が晩年においてもますます自由独立に邁進していた事を示している。胡適は一再ならず「自由独立の国家は奴隷

によっては築かれない」と強調した。こうした彼の主張は生涯変わらず、歳を重ねるにしたがってますます強固になった。

胡適と魯迅は自らを喩える点でも驚くほど似通っている。魯迅はもっぱら自分を悪いニュースを告げる「悪鳥」に喩え、胡適は自分を不吉な事をカアカアと鳴きながら唱える「カラス」に喩えた。魯迅は一生「強い自尊心を以って、天下を昭聞する」という民族のひどい自惚れを批判する事を止めず、また「仮に得体の知れない腫瘍でも、中国人の体に生じたならば、赤く腫れ上がり、桃の花のように鮮やかになる」<sup>(6)</sup>と役に立たないしきたりをいつまでも固守する者を風刺した。胡適も同胞へ「神様は我々の祖先に決して広大で豊かな土地を与えたのではなく、とても貧しい地を与えたのだ。土地は広大といえども、耕作地は20%に過ぎず、三分の一は全く使えない。それゆえに、我々の祖先は生まれた時から困難に直面したのである」<sup>(7)</sup>と同胞を諷めた。魯迅は国民に大きく目を開いて現実を直視し、「隠し事や誤魔化しの恩恵」<sup>(8)</sup>から脱却すべきと強く呼びかけた。胡適は「大きく目を開いて世の中の本当の現状を見るべきだ」<sup>(9)</sup>と鼓吹した。彼らはその生涯を通じて「徹底して猛烈に真実の精神」<sup>(10)</sup>を先に立って唱導した。

1950年代半ばに胡適は「魯迅はリベラリストであり、決して外部の圧力に屈しなかった。魯迅は我々のグループの人物だ」<sup>(11)</sup>と人に語った事がある。これは決してふとした随意の言葉ではなく、長期の周到な熟慮を経た後に出された結論である。では、リベラリズムとは一体如何なるものか？胡適は「健全なる個人主義」、英語ではインディビジュアリティ（individuality）を提唱し、あわせてそれを次のように解釈した。

第一に、思想の独立、即ち他人の耳を自分の耳にせず、他人の目を自分の目にせず、他人の知能を自分の知能にせず。第二に、個人は自己の思想・信仰の結果に対し全て責任を負う。権威を恐れず、監禁や死ぬ事を恐れず、ただ真理を見極め個人的利害にとらわれまい<sup>(12)</sup>

胡適の言うリベラリズムとは、こうした「健全なる個人主義」であり、第一に、独立した思想を有し、第二に、権威を恐れずただ真理を見極める精神を持つ事である。こうした観点から見れば、中国近代において魯迅と胡適は、代表的なリベラリストだったと言えよう。

### Ⅲ. 魯迅と胡適の思想的相違点

魯迅は中国人の精神的自覚を導き出す時に、内面から省みる事に重きを置き、人々を思考の内面と精神の根本的部分から啓発し、大いに考え改めさせ、正確な自己認識と世界認識との疎通をはからせようとした。魯迅が青年時代に書いた初期の論文『摩羅詩力説』では、「精神界の戦士」の到来を大声で呼びかけ、中国人の精神的自覚を待ち望み、そして次のような名言を提起した。

己をつまびらかにするは首たり、また必ず人を知るべし。比較があまねくしつくせば、ここに自覚が生じる。

その意は、まず自己を詳しく検証し、また他者も理解し、相互の比較を周到に行えば、自覚が生まれる、という事である。魯迅は阿Qという典型的な人間像を描き出し、人々の精神を内面から映し出し啓発を行った。彼の雑文において、このような問題の本質に触れる啓発的論説は枚挙にいとまがない。阿Qは無意識的に愚昧な人であり、彼は終生正確な自己認識、世界認識、及び世界における自己の位置を認識できなかつた。彼は間抜けで、愚かで、自信たっぷりな時は、鼻息を荒くし弱者を侮り、失敗した時もまた「精神勝利法」に頼り、失敗を勝利に変える「欺瞞と誤魔化し」の中で首尾よく処理した。セルバンテスはドンキ・ホーテという不朽の人間像を通して、人類が客観的な物質世界の発展変化から容易く遊離し、主観主義の誤りに陥る普遍的弱点を持っている事を描き出した。

魯迅は阿Qという生々しい人間像を通して、当時の中国の愚昧な誤魔化し、自分をだまし人をもだます精神的現象を描き出すとともに、人類が容易く現実逃避し、心を内に引き込み精神的勝利を探し求める精神構造と普遍的弱点を持っている事も示した。ドンキ・ホーテは死に際して、ようやく自分が平凡な人間で騎士ではないと理解した。阿Qは法廷に突き出された時に至っても、まだ自分がどのような最後を迎えるか、理解しなかつた。この二つの人間像を描き出す技術は、巧みな手法で人々に自己認識を啓蒙し悟らせ、精神的自覚を実現させようとした。そして、阿Qは中国化され中国人に対し特殊な啓蒙的意義を持った。魯迅は1936年10月5日に至るまで、即ち、最後を迎える14日前に発表した『立此存照（三）』において同胞へ「我々は己を知る明を持たなければならない、また他者を知る明も持たなければならない」と、懇々と教え諭し続けた。とどのつまり、魯迅は自己を形成させ、世界をも認識させる、という枠組み認識から、「識を転じて智となし」、自覚を形成させようとした。

その根源を追求すれば、人類が誕生して以来、即ち精神を有した時から、この問いを迫る事と思考する事は始まっていた。かつて先祖たちは、古代ギリシャの神殿に後世への諫めとして「自己を認識せよ」と彫り込んだ。モンテーニュも「世界上で最も重要なのは自己を認識する事である」と述べた。ドイツの哲学者のエルンスト・カシアーの名著『人論』<sup>(13)</sup>の最初の言葉も「自我の認識は哲学が探求する最高の目標である…これは皆が一致して公認している」。朱智賢は『児童心理学』で、自己認識は自己を主体とし客体から区別する、「これは人類意識が動物心理と区別する点において重要な指標の一つである」と指摘した。児童は一歳の終わり頃から、自己の動作と対象の動作を区別し始めるが、これは「自我意識の最初の表現」である。児童が代名詞の「我」を掌握する事は、「困難な任務だ」。大体2、3歳の時に、やっと「言語交流を通じてこの代名詞を掌握する事が可能となる。乳飲み子の時期における児童の個性特徴の萌芽的表現は、自我の形成、初歩的道德判断と道德行為の始まりの出現として、特に着目に値する点である」。

民族も同様に、このような児童から成人へ至る成長過程を経る必要があり、一步一步自己を認識し、自我意識の自覚を実現させなければならない。思想家にとって最も重要な使命は、自民族をして正確に自己を認識させ、それを促す点にある。近代以降中国では、梁啓超・嚴復から胡適・周作人に至るまで、歴代の思想家はみな中国人に自己を研究させる事を懇切に促し、国民性の弱点を再認識させた。梁漱溟に至っては、「孔子が終生研究したのは、疑いなく傍か

らでなく明らかに彼自身である。どうしても名前を付けなければならないのなら、それを『自己学』と呼ぶ事ができよう<sup>(14)</sup>と述べた。そして、一生涯変わらず、且つ根源を捉え哲学の根底から中国人を啓蒙し悟らせ根本的な自省を促した人物は、魯迅の他に第二の人物を探し得ない。魯迅は根源を捉えるに長けていたのみならず、文学を手段として、人々を啓蒙させ自己認識の要領を悟らせイメージさせる技能も身に付けていた。実際に、魯迅が終生奮闘した目標は、文学を以って武器となし、「あくまでも自己を研究しない」<sup>(15)</sup>中国人を啓蒙し悟らせ、自己認識と世界認識を学ばせる事であった。

胡適は中国人の精神的自覚を啓蒙し悟らせるのに、外から取ってくる事に重きを置いた。彼は西洋、主にアメリカの民主的政治様式と先進的な思考方式を導入し、あわせて近代的な観点を以って中国の伝統文化を再吟味し、「国故整理」において古いもので良いものを新しいものに生かそうと試みた。

胡適は故郷で九年間伝統的教育を受けた後に、上海の梅溪・澄衷・中国公学などで七年間新式学堂の教育も受けた。その後、渡米してコーネル大学・コロンビア大学などで学び、厳格な西洋の近代学術を研鑽した。胡適が学びを求めた過程は、中国の学術文化が伝統から近代へ急速に転換した時期ともかさなる。その中で、アメリカにおける七年間の留学生活は、彼の学業が成長した重要な時期だった。この七年間で彼は系統的に西洋の学術を研鑽し、身をもって西洋の政治社会の生活を体験し、またその伝統文化とも接した。その上で、彼は積極的に自国の伝統典籍を深く研鑽し、中国文化を改める道筋を思考し、文学・哲学等の分野において新たな突破口を探し出し、それによって彼の生涯の志と職業の基礎を定めた。

胡適が後に「にわかには盛名をはせる」と呼ばれたのは、「時勢が英雄をつくる」という要素にもよるが、それよりも本人の知識の蓄積が思想を優れたものにしたと考えられる。彼の生涯は、アメリカなど西洋文明の中から取り入れ、人類の先進的文化様式を以って中国文化を改める過程であった。即ち、「西洋を援用し中国へ導入する」という事である。当然、彼は取捨選択をして「外から取り入れ」ている。取り入れたものは、アメリカのリベラリズム・憲政など先進的で合理的なものであり、覇権・無作法な面は捨て去った。

胡適の詩集を今日の観点から見れば、魯迅の『野草』・『朝花夕捨』などのような芸術性に乏しく、『白話文学史』・『中国哲学史大綱』などの著作は、専門的な文学史研究者や哲学研究者のように、徹底した研究、綿密な分析を行っていない。しかし、胡適の根源的な貢献である「先駆性」は、いかなる人も彼に及ばない。それは、「科学実験室的態度」、「歴史的態度」及び「一再の価値を疑う精神の再評価」を中国思想界に導入し、外来の概念を取り入れ、自国の固有の伝統と相互に照らし合わせ中国に新たなパラダイムを提供した事である。胡適は新文化運動の意義を「問題の研究・学理の輸入・国故の整理・文明の再生」<sup>(16)</sup>の四点に定め、また彼自らもこの四点に立ち、生涯を通してその活動を展開した。彼の先駆性を可能としたのは、彼の「浅薄」な科学的方法とロジックにかなった白話文字にある。彼の功績は、新たな方法と新たな手段を提起した事にあり、具体的な知識や技術の側面でない。多くの人は、彼が『白話文学史』と『中国哲学史大綱』を、上巻しか書かなかった事に対し不満・遺憾あるいは風刺して「未完の書物」と斥けた。しかし、これは実に愚鈍な見識である。なぜなら、胡適は全く続編を書く必要がなく、この「未完の書物」で彼はすでに「先駆性」という歴史的役割を果たした

からである。

最も賞賛すべきは、胡適が自己の活動を学術文化の圏内だけに制限せず、大胆にも社会政治的潮流と共に邁進した事である。彼はリベラリズムを一つの朦朧な文化意向から自覚的な思想構造に引き上げる事により、社会政治的側面においてリベラリズムの性格を展示させ、思想理論と行為規範上からリベラリズムのモデルを確立させようとした。まさに胡適は、自身が提唱した「健全なる個人主義者」の忠実な実践者だった。これは中国のような社会においては、非常に得難い事である。彼は一生涯リベラリズムの立場を堅持した。1956年9月、陳源が周鯁生へ託した胡適へ宛てた書簡において、「あなたに関して〔胡適思想批判に関して、訳者注〕、あなたの思想に対するものであり、あなた個人に対するものではない。仮にあなたが国に戻ってくれば〔中華人民共和国、訳者注〕、きっと歓迎される」と伝えた。胡適はこの語句にアンダーラインを引き、「思想を除いて、何を以って『私』と言うのだ」と書き付けている。胡適の反駁は間違っておらず、彼の思想は開放された社会では、最も基本的な必要条件である。胡適の思想を封じる事は、社会を閉じる事であり、五四の民主自由を封殺する事でもある。

人が自己を認識するのは最も困難な事である。たとえ非凡な才能・悟性を持った文化的偉人の魯迅や胡適と雖も、時には自己の価値の所在をはっきりとは理解できなかった。魯迅の主な価値は、「内面から省みる」事にある。しかし、晩年において魯迅は多くの精力を『死せる魂』の翻訳に費やした。胡適の主な価値は、「外から取り入れる」事にある。しかし、胡適の晩年は『水経注』の研究に過大な心力を注ぎ込んだ。仮に魯迅が残り少なくなった命を使って数編の「内面から省みる」散文、雑文あるいは長編小説を書き、胡適が『水経注』研究の精力を、アメリカのリベラリズムの実践に費やせば、中国文化の建設に対しさらに大きく貢献できたに違いない。

しかしながら、彼らにも各々長所と短所がある。

魯迅の思考力は特に本質を突くので、中国人の精神的根底を追究し得る。彼は最も中国人を理解し、また最も中国を理解し、特に中国の歴史と統治者の心理を理解していたので、最も国情に適合した対策を探し出せた。しかし、魯迅は西洋やアメリカ式の民主主義に対し十分な理解を欠き、民主政治の研鑽にも乏しかった。この事は、彼に高度な理性から中国近代化の道を探し出させる事を難しくした。

胡適はアメリカのコネル大学において系統的な現代科学の教育と厳格な民主政治の訓練を受けたので、グローバルな観点を持っていた。この事は、彼に思想を前進させ得る多くの示唆に富む先駆的な予見を行いせしめた。しかし、胡適は中国の国情、特に中国農民に対し深い理解が欠けていた。彼は中国の封建専制主義の頑固な事、陰険で悪辣な事、反封建専制主義が並大抵でない事、持続性を有する事などに対し十分な体験と認識を欠いていた。さらに、アメリカのものが決して何もかも良いのでなく、仮にアメリカのものが良くても、中国へそのまま援用しても適用できるとは限らない。それゆえに、分析と批判を行わなければならないのであるが、この点に関して胡適は明らかに十分でない。この事がまさに彼の「全面的西洋化論」が生み出される思想的根源になった。

魯迅は内面から省みる事に重きを置いたが、決して彼が外から取り入れなかった訳ではない。実際に魯迅も外から取り入れる事を行った。だが外からの取り入れ方に関し、魯迅と胡適は同

じでない。胡適は直接アメリカから西洋の先進的な民主政治理論と科学的思想を取り入れたが、魯迅は日本経由で東洋・西洋文化を取り入れた。つまり、日本の文化と日本の加工を経た東洋・西洋の思想文化が、魯迅の思想の重要な本源になり、参照物になった。

しかし一般的に言えば、外から取り入れる事は容易く、内から省みる事は難しい。外から取り入れる事は、まさに容易いがゆえにその効果は、表面的に広まり、「注目」され易いが、甚だしきに至ってはバブルになる。しかし、内から省みる事は難しいがゆえに、少数のものしか進んで力を注がないが、真の変革はまさにこの点いかんにかかっている。そうした意味において、「内から省みる」という事は「外から取り入れる」より難しいので、魯迅は胡適を超えている。

#### IV. 相違の根本的原因

相違の根本的原因は文明背景の違いにあり、魯迅が受け入れたのはヨーロッパ大陸的な東洋文明で、胡適は完全に英米式でひいては純アメリカ式の西洋文明である。

いわゆる、ヨーロッパ大陸的な東洋文明とは、フランス革命から伝わってきた一種の全体主義的な民主政治思潮である。この思潮は暴力の助けを借りて旧社会を覆し、改めて新たな国家と新たな人を作り上げる。一見すれば民主的であるが、一旦目的を達成すれば非常に速く高圧的な政治、中央集権的な政治様式に進展変化し、人民を再び奴隷状態に陥らせ、それを幸福な状況とした。この思潮は後のヨーロッパでは批判を受け軟化したが、東へ移動しロシアという天然の庭園を見つけ出した。ロシアでは、代々の圧迫と農奴制度によって階級の恨みが造成されていたので、理想主義は新たな活力を得られた。その後、長期間封建専制主義の搾取と帝国主義の侵略に遭い、また農民が大多数を占めた中国でも、自然とこの思潮は受け入れられた。20世紀初めに日本へ留学した中国人留学生は、往々に最も容易くこの思潮の虜になった。これはロシアと日本へ留学した中国知識人の多くが共産主義に共感した原因である。この時に魯迅も後に共産党に共感する思想的基盤を築いた。それが優れているのは、中国の最下層で圧迫を被っていた階級に根ざし、旧社会へ反抗する強大な動力を獲得し得た事である。短所は、ヨーロッパ大陸の全体主義的な民主政治の負の側面の影響を受け、英米リベリズムと西洋の民主政治に対し本能的に排斥する態度をとる事であった。

1925年に胡適は陳独秀へ宛てた書簡で、北京の群衆が『晨報』館を包囲して焼き討ちした事に対し陳とは異なる見解を述べた。その中で最も根本的な部分は、「皆が己と異なる意見と信仰を許容することを期待する。おおよそ己と異なるものを承認しない人は、自由を争う資格、自由を論じる資格がない」という点である。この書簡は詳細に検証する必要があるので、以下にその内容を示す。

独秀兄：

数日前に私たちは北京の群衆が『晨報』館を焼き討ちした事を話し合った。私〔胡適、訳者注〕はあなた〔陳独秀、訳者注〕へ私の意見を表明した時に、あなたは私へ『『晨報』館を焼き討ちすべきでないと思うのか?』と問うた。

5、6日間、この一句が常に私の頭の中を行き来した。我々は数十年來の友人であり、

少なからず共に仕事を行って来た。…しかし、最も異なるこの点だけは見過ごせない。私は我慢できないので、あなたへ幾つか話をしたい。

数十人の暴動分子が新聞社を包囲して焼き討ちする事は決して不思議な事でない。しかし、あなたは政党の責任ある指導者であり、この事を気につけないばかりか、「焼くべきである」という考えは、私をいぶかせる態度だった。

あなたと私は、かつて共に自由を争う宣言を発表したではないか？あの日の北京の群集も「人民の集会・結社・言論・出版の自由」を宣言したではないか？近年の『晨报』の主張が、あなたと私の目に是か非かのどちらかに映ったにせよ、決して自由を争う民衆の焼き討ちした罪状と自任すべきではない。なぜなら、自由を争う唯一の原理は、「我と異を唱えるものが、必ずしも間違いだと限らない、そして我と同じ事を唱えるものが、必ずしも正しいとは限らない、今日の大衆が是とする事も、必ずしも是とは限らない、そして大衆が非とする事も、真に非であるとは限らない」からである。自由を争う唯一の理由を換言して言えば、即ち、皆が己の意見や信仰を容認できる事に望みをかけるからである。おおよそ、己と異なる人の自由を認められない人は、自由を争う資格がなく、また自由を論じる資格もない。

私もあなたが階級独裁を主張する人が、すでに自由という文字を信仰しない事を知りました。…しかし、私があるに理解して欲しいのは、この点が私の根本的な信仰であるという事です。我々は長い付き合いのある友人であり、たとえ政治的主張において、また事業において異なるといえども、我々がまだ友人として付き合いを無くしていない所以は、私とあなたの頭の中には、まだ少なからず同じく己と異なるものを容認する態度を有しているからであろう。…仮にこの最低限度の共通点をなくすのであれば、我々は友人ではないばかりか、仇敵になるであろう。あなたはどのように考えますか？<sup>(17)</sup>

「己と異なる事を容認する」と「暴力に反対する」という二点は、胡適が堅持した基本原則であり、これらは、すでに彼のアメリカ留学時代において確立されていた。重要な出来事に遭えば、胡適と陳独秀との分岐は明確に現出する。晩年の陳独秀は、胡適が堅持する「根本的信仰」にまた戻った。1940年に陳は『我的根本意見』の一文において、「プロレタリア民主は非現実的な名詞でない。その具体的内容も、ブルジョワ民主と同じく全ての公民へ集会・結社・言論・出版・ストライキの自由を要求しており、特に重要なのは党派に反対する自由を有している事である。これらがなければ、議会あるいはソビエトなどは一文の価値もない」事を強調した。これは完全に1925年に胡適が陳を批判した書簡における言い方と同じである。胡適から陳独秀へ宛てた書簡における、両者の北京群集の『晨报』新聞社焼き討ちに対する異なる見解からは、十分に西洋文明を背景にするものとヨーロッパ大陸の東洋文明を背景にするものとの間に、自由民主に対する考えに大きな差異がある事を見て取る事ができよう。

1925年の北京群集の『晨报』新聞社焼き討ちに対し、魯迅はどのような態度をとったのか？文字、著作からは如何なる反応も採し出せない。日記、書簡の中にも、少しの痕跡も残っていない。1925年11月29日の日記には、ただ友人との往来と夜に『自然主義の理論及び技巧』を訳すと記すにとどまる。30日の日記には、北京大学に講義へ向かう事、友人の来訪の事、『越

縵堂日記』二冊を返した事などを記しているに過ぎない。書簡は、1925年11月8日に許欽文宛て一通、1926年2月23日に章廷謙宛て一通がある。この三ヶ月の間にその他の書簡は残されていない。魯迅は北京の群集が『晨報』新聞社を焼討ちした事を知らないはずはないと思われるが、上海に居た陳独秀と胡適はこの事に関心を抱いたのに、北京に居た魯迅が全く触れていない事は実に腑に落ちない。しかし、魯迅は1923年12月26日に行った「ノラは家を出てからどうなったのか」と題する講演で、「一時の犠牲に驚愕する事は、感情を顔に出さない強靱な戦闘に及ばない」と述べた事がある。1925年の5・30事件の後に魯迅は『忽然と思いつ』と題した一文で、「イギリス人の品性は、我々が学ぶべき点が多い」、「なぜなら、我々の古人は大抵奥深く虚無なものを漂わせ、平穩で円満に事を収めるに苦心と労力を尽くし、苦難に満ちた事情を的確に残して、後世の人が補足する事を期待した」が、ちょうど良い時に我々は、「強大なイギリス人を以って他山の石となし」、自らを鍛える事ができるからである、と説いた。また魯迅は青年達へ繰り返し「我々は再び嘆願を行わない」、強靱性や力量を重要視する一貫的な思想を持たなければならない、とも説いた。それゆえに、魯迅は陳独秀のように『晨報』新聞社焼討ちには賛成しなかったと断定できる。しかし、魯迅は胡適のように明確に「己と異なるものを容認する」という西洋の民主的観点を提起しなかった。だがこの問題に関して、必ずしも魯迅への厳しい要求、あるいは当時彼が中国共産党に一方的に共感を抱いた事を譴責する必要もない。なぜなら、1927年の反共クーデター以後の国民党・蔣介石政権は、「己と異なる意見」を容認しないばかりか、己と異なる者の生存権すら「間違っただけで千人殺しても、一人として取り逃がさない」と容認しなかったからである。共産党と平民に対する監禁、虐殺などは、日常茶飯事になり、己と異なる者を責め立てたので、ただ井冈山へ登って武装集団を組織して統治者と抵抗する他なかった。1927年4月12日の虐殺は、魯迅ら左翼人士の政治的傾向を無理やりにつくりだし、1949年の共産党の勝利と国民党の敗北を鑄造させたと言えよう。歴史と現実の無数の事実は、繰り返し我々に、思想文化についての問題は、武力による鎮圧では解決し得ず、かえって鎮圧が苛烈を極めるほど、反抗も強固になる事を告げている。悪をもって悪に抗し、仇をもって仇に対するのでは、歴史を悪性循環の枠内に落とし入れるだけである。

以上から、英米リベラリズムとヨーロッパ大陸の全体主義との哲学上の対立を掲示して、ヨーロッパ大陸の全体主義的民主政治がソ連と中国に出現した原因に対し歴史的分析を行う。そして、その負の面の影響に対し本質的な批判と感情を排した自己反省を行い、以ってさらに明朗で理知的な解釈を中国の知識体系に築く事が、現在の中国学術界の切迫した任務であると考えられる。

## V. 新たな中国文化の創出—魯迅学と胡適学の結合—

1997年に程思遠氏は、中華調和的文化精神を發揚させる事を提案した<sup>(18)</sup>。氏は文明間には衝突があるだけでなく、調和もできると考えた。異なる思想文化は、相互に交流すれば、決して衝突を引き起こさない。

胡適は「儒家には固有の真理があり、老・莊・墨・翟にも真理がある」<sup>(19)</sup>という名言を述べた事がある。この言を引けば、胡適には固有の真理があり、魯迅にも固有の真理があると言えよう。彼らの真理的部分は、中華民族のみならず人類にとっても貴重な財産であり、珍重して

大事に汲み取るべきで、決して蔑視し捨て去るべきではない。しかし、不幸なのは、我々が常に見るのは融合ではなく、氷解である。魯迅の氷解か、胡適の氷解かのどちらかであり、あるいは、両者などは全く不要だ、などである。

私は最近の魯迅の言論を低く評価するものと、胡適を責める文字を対比させた。そこで人民大衆の様々な観点には、意外にも驚くほど似通っている点がある事を発見した。ある人は魯迅を急進派とみなし、中国伝統文化に対し全面否定を行ったと罵っている。ある人は胡適を「乱臣の賊」とみなし、彼が提唱した「文学革命」などは一文の価値もないと罵っている。ある人は魯迅を中共のお先棒を担ぎ、神州〔中国、訳者注〕を押し沈める役割を担ったと罵っている。ある人は胡適を「中共の先駆け」とみなし、大陸での失敗を招いた「元凶」であると罵っている。ある人は、魯迅には長編小説がなく偉大な作家ではない、胡適も学識がないと罵っている。ある人は、魯迅は「石頭」であり、必ず排除しなければならないと罵っている。ある人は、胡適の中国に対する影響を「胡適の災い」とみなし、必ず清算しなければならないと罵っている。

なぜ対立する魯迅と胡適が、まるで同じような非難を受けるのか？肝心なのは、彼らには差異があると雖も、中国の近代化・民主化を推進させた事である。これは五四運動からたゆまなく進められた、中国社会を中世期から脱却させる内在的な支点を提供した。彼らを罵る人たちは、年配者・若者・官僚あるいは市民にかかわらず、民族的反省と近代化への転換を行う事に反対し、中国社会を元に引き戻そうと考えていると思われる。

その他に、思考モデルにおいて中国の伝統文化の中には、「全体主義」的思想習慣の影響が残っている。それは全面的に肯定するか、あるいは全面的に否定するかという事だ。つまり盲目的に崇拝するか、あるいは一律的に氷解するかで、歴史弁証的科学分析を行っていない。これは、相当多くの中国人がいまだに精神的乳児期にあり、成長しておらず、思想的にもまだ成熟していない事を現している。

良好な人文的環境においては、仮にあなたの100の話の中に、99の間違ひがあろうとも一句は正しいので、その一句の真理を吸収し、99の間違ひにはけちをつけない。しかし、良好でない人文的環境においては、往々に状況は相反し、99の正確な話にはけちをつけず、一句の間違ひを常に捕まえて放そうとしない。かつて魯迅も繰り返し、「中国の評論家は、大抵とても厳格である」<sup>(20)</sup>、「中国の論客は、事と人を論じる時、一貫して苛烈極まりなく残酷である」<sup>(21)</sup>と嘆いた。自民族の文化人に対してもこのように対処し、往々にして彼らの創造的な文化的精華の吸収に目を向けず、なるべく注意力を彼らの生活の些細な事、即ち、魯迅と最初の妻の朱安との関係や胡適の不倫、魯迅がよく当り散らした事や胡適の軟弱な性格などへ集中させる。これらは全て大局的な事に目を向けていない。中国の文化人は、そもそも多くない上に、かくのごとく容赦のない酷評とたびたびの政治運動で苦しめられ、本当に余すところ幾ばくもいなくなった。このような事を続ければ、損失を被るのは自らの民族ばかりである。それゆえに、我々はまず、魯迅と胡適から文化的精華を取り入れ、彼らの創造した真理の部分融合し、民族の文化的栄養にする。不正確な部分は歴史的な科学分析によって合理的に捨て去り、再び蓄積した財産を浪費して自滅すべきではない。

真の学術は、必ず科学によって事実を求める精神を基本とする。どれだけ反対する、あるいは尊敬するにかかわらず、科学的態度によって対処し、事実を求める精神によって正確な分析

を行わなければならない。これは胡適が説いた「一般に一人を論じるには、常に公正でなければならない。その悪い点を知るまでを大切にし、そのすばらしさを知るまでを嫌がらなければ、公正を保てる」のである。まさに胡適はこの極めて貴重な学理の精神を以って魯迅に対応した。両者は政治的には対立したが、「できるだけ一切の枝葉末節はさておいて論ぜず、もっぱら彼の思想は一体如何なるものか、どのような変遷を経たのか、信仰するものは何か、否定するものは何か、如何なる事に価値があり、如何なる事に価値がないのか」という事を論じた。確かに「このような批評は、かならず効果を挙げる事ができる」<sup>(22)</sup>のである。同様に魯迅も、「口汚く罵る事と、脅しつける事は、決して戦闘ではない」「戦闘とは作者が『論争』を重要視する事である」<sup>(23)</sup>と強調した。

このような科学的な学理の精神は、歴史上の人物を処するにおいて、歴史弁証的科学分析の方法に集中して現れる。また、歴史的細部からその発展の軌跡を把握し、人物の思想を歴史変遷における過程の諸形態から追跡し、各家各派の思想的起源と発展の淵源脈絡及びその浸透・交替・変遷の法則をも探し出す。それによって歴史的経験を総括し、価値のある思想をまとめて、現実と未来の実践に役立て、我々の社会を合理的に変えて、人の生活をさらに幸福にさせる。

未来の中国文化の最も良い発展方向は、広範な材料の中から精華を取り出し、多元的にお互いを補う事であり、一方がもう一方を消し去る事ではない。胡適と魯迅が提起した論敵に対する科学的規則は、全ての学者が遵守すべきである。手本となる二人の旗手〔胡適と魯迅、訳者注〕が共通して提唱した学理の精神を堅持してこそ、はじめて「国民を励まし、質朴な話ができ、質朴に話を聞く事ができる」<sup>(24)</sup>のである。つまり中国の学術を健康的に発展させ、中国の国民性の曲がった部分を直してこそ、はじめて徐々に精神が成熟されて行くのである。

現代中国には最も必要な学問が二つあり、その一つは、「魯迅学」であり、もう一つは、「胡適学」である。この二つの学問を整合的に行い、総合的な新機軸を打ち出し、魯迅と胡適が体現した東洋・西洋文明の優秀な成分を融合させ、それを高める事は、まさに新たな現代中国文化を創出する上で最も良い道程となろう。良識ある中国の学者は、自覚してこの方向へ向かって努力しなければならない。

## 注

- (1) 「答有恒先生」(『魯迅全集』第3巻) 453頁。
- (2) 「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」(『魯迅全集』第6巻) 537頁。
- (3) 「在兩位未謀一面的歷史偉人之間—記馮雪峰關於魯迅与毛沢東關係的一次談話」『中国現代文学文学研究叢刊』第3輯、北京出版社、1980年。
- (4) 馮雪峰『回憶魯迅』人民文学出版社、1952年。
- (5) 『美国政治社会科学会年報』、1941年。
- (6) 「隨感録三十九」(『魯迅全集』第1巻) 318頁。
- (7) 胡適「中国歴史的一个看法」(欧陽哲生編『胡適文集』12巻、北京大学出版社、1998年) 103頁。
- (8) 「論睜了眼看」(『魯迅全集』第1巻) 240頁。
- (9) 胡適「易卜生主義」(『新青年』1918年6月)。

- 
- (10) 胡適「紹介幾部新出の史学書」(『現代評論』第4巻・第91期)。
- (11) 李慎之「回帰『五四』学習民主—給舒蕪談魯迅、胡適和啓蒙的信」(『書屋』第5期、2001年)。
- (12) 胡適「非個人主義的新生活」。
- (13) 卡西爾『人論』上海訳文出版社、1985年12月。
- (14) 梁漱溟「孔子学説之重光」(『梁漱溟先生論儒佛道』広西師範大学出版社、2004年3月) 7頁。
- (15) 「馬上支日記」(『魯迅全集』第3巻) 331頁。
- (16) 胡適「新思潮の意義」(『胡適作品集』第2冊、台湾遠流出版社、1986年)。
- (17) 前掲『胡適文集』第7巻、75頁。
- (18) 「世代弘揚中華和合文化精神—為『中華和合文化工程』而作—」(人民日報・光明日報・人民政協報同時発表、1997年6月)。
- (19) 『胡適の日記手稿本』、民国10年7月9日。
- (20) 「致孟十還」(『魯迅全集』第13巻) 書信 351020。
- (21) 「致蕭軍」、同上、書信 351029。
- (22) 「關於当前文化動態的討論〔通信〕」(中国社会科学院文学研究所・魯迅研究室編『1913年—1983年魯迅研究學術論著資料彙編』第2巻、中国文聯出版社、1986年8月) 689頁。
- (23) 「南腔北調集・辱罵和恐喝決不是戰鬥」。
- (24) 前掲『1913年—1983年魯迅研究學術論著資料彙編』、689頁。

(邦訳 佐藤一樹)